

【書評・紹介】

M. M. ドブロトウヴォールスキー (著) 寺田吉孝・安田節彦 (訳)
「アイヌ語ロシア語辞典 (1) ~ (26)」

(札幌, 北海学園大学, 1995年6月~2019年3月, B5版, 1134頁, 非売品)

阪 口 諒

ここで取り上げるのは、M. M. Dobrotvorskij, *Ainsko-Russkij Slovar' Kazan, 1875.* の翻訳である(以下『辞典』、翻訳に限って言及する場合は「翻訳 1~26」のように表示する)。原著は、145年も前に刊行された本であるが(Refsing (ed.) 1996に再録)、サハリンで軍医として勤務していたドブロトウヴォールスキー(1836-1874)が、樺太アイヌの言語文化に関して記述したもので、『辞典』は調査当時のサハリンの状況を知る上でも重要な書物である。特にアイヌ語資料としての『辞典』の重要性は中川(1985)が指摘しているが、数多くの先行記録を参照している『分類アイヌ語辞典』(知里 1975; 1976)でも、ロシア語で書かれているためか、『辞典』に触れられていない。『辞典』はタクサミ・コーサレフ(1998)をはじめとした若干の研究で用いられるにとどまり、十分に活用されてきたとは言いがたい。寺田・安田両氏による日本語訳が完結したことを期に、本書の持つ意義とその利用法について考えてみたい。

この辞書は、1万語余りのアイヌ語の単語を含んでいる。他の書籍、報告からの引用も多いが、その半分以上の5733語は、著者自身によってサハリン島で収集されたものである(そのうち100語が人名で511語が地名)(翻訳 2: 63の記述による)。5年もの間、サハリンで暮らしていた著者による『辞典』は、収録語数が多いだけでなく質の高さも伺える。序文や付録部分に収録されている著者の論文を合わせて読めば、文化的な背景についても知ることができる。

まず、本書の構成等を以下に紹介する。翻訳(1)に掲載されている寺田氏が訂正を加えた目次(『辞典』にある目次は内容と食い違っているため)は以下の通りである。

この辞書の著者について

序文

I. アイヌとその言語の研究のため

II. アイヌ

III. アイヌ語の単語の正字法

IV. 字母「イロハ」

M. M. ドブロトウヴォールスキーの「アイヌ語・ロシア語辞典」

付録

1. プフィツマイエールの著作についての検討

2. アイヌについての覚え書き

3. アイヌの人口

4. アイヌの宗教、哲学、文芸

5. アイヌの医学

6. アイヌの食べ物

7. アイヌの衣服
 8. 住居
 9. アイヌの仕事
 10. アイヌの風俗、習慣
 11. 四季と月
 12. 名詞変化と動詞変化、語順
 13. 目次
- あとがき
正誤表

まず、本書には、編者（著者の兄）による著者紹介や先行文献の紹介、アイヌ民族に関する概説、アイヌ語の音声、表記法についての解説が含まれており、原著で 76 頁を占める。その後、本書の大部分を占める辞書部（上の目次で、M. M. ドブロトウヴオールスキーの「アイヌ語・ロシア語辞典」とあるもの）が続く。この部分が 487 頁を占めている。そして、著者による論文、遺稿が付録として 91 頁（原著による）付属している。「II. アイヌ」は樺太アイヌの文化や、当時の樺太アイヌが置かれた状況を理解するのに重要な部分である。そして、辞書部はキリル文字表記のアイヌ語をロシア語で解説したものである。キリル文字の配列順序に従っているので、英和辞典などの配列とは異なっている。この部分の翻訳は、原著と翻訳を見比べることのできる構成となっており（切替英雄氏の示唆によるという）、いつでも原著に戻って確認することが可能となっている。辞書部には、省略記号が多用されているが、訳者は省略記号の解明に手間を惜しまず翻訳に当たっている。引用されている文献に関する調査も目を見張るものがある。

付録部分の冒頭は、先行研究であるオーストリアのプフィッツマイエールのアイヌ語研究を批判的に検討した部分である。その後、アイヌの民俗を考察した論文などが続く。特に医療に関する記述は、著者が軍医であったこともあり詳しく記述されている。そして、付録の末尾には短い 3 つのアイヌ語テキストが記録されている。ロシア語訳（完全ではないが）と辞書部に収録された語彙、例文からアイヌ語テキストのだいたいの内容を知ることができる。

付録は樺太アイヌの民俗を知るうえで非常に興味深い。例えば、名付けに関しては次のように述べられている。

子供が生まれたとき、歩けるようになるまで名前を付けない。歩けるようになったときにもらう名前も本当の名前ではなく、10 歳になって初めて本当の名前をもらう。この名前は、亡くなってから間もない祖父（あるいは祖母）に肖って自分の名前をかえる（この風習は、アイヌ語で *uréikes'koro* と呼ばれる）といった機会がなければ、一生持ち続ける名前である。（翻訳 3: 86）

樺太アイヌの名付けに関しては意外と知られておらず、この報告は興味深い。子供がある程度大きくなるまで名前を付けないというのは北海道アイヌに関してもよく知られていることである。そのほか、意外と不明点が多い挨拶に関しても興味深い記述が見られる

(翻訳 3: 85; 26: 139, 142)。評者が特に気になったのは以下の部分である。

丸腰のアイヌに熊が襲いかかっても、アイヌは死んだふりをして、身動き一つしない。たとえ熊がアイヌに噛みつこうとしていても、アイヌが身動き一つしないのが分かると、熊はすぐに行ってしまうらしい。(翻訳 26: 136)

一般にクマにあった時の対処法として広く信じられているように思うが、この方法は、少なくとも北海道アイヌの間では一般的ではないと思われる。

本書は、アイヌ語学史上でも重要な資料であるのは疑いが無いが、アイヌ語学習者にとってはまだまだ使いにくいと思われる。特に樺太方言に関しては、容易に学習の手がかりを得ることができないため、『辞典』の辞書部をきちんと使いこなせる人は限られているだろう。いくつか使用するうえで参考になるとと思われる部分を述べておく。

まず気になるのは、キリル文字のラテン文字転写である。ラテン文字への転写は翻訳(5)の176頁で述べられている方式に従っている。寺田氏も翻訳(23)の「訳者まえがき」で述べているように、キリル文字 *e* をラテン文字 *ye* で転写したことでアイヌ語表記から大きくずれたものになってしまっている。さらに、アイヌ語表記(アコロイタク方式)に近づける場合、例外もあるが、おおよそ次の通りにすると良いだろう。

a = a, б = b, в = w, г = h, д = t, e = e, ё = yo, ж = c, з = c, и = i, й = y, к = k, л = r, м = m, н = n, о = o, п = p, р = r, с = s, т = t, у = u, ф = h, х = h, ц = c, ч = c, ш = s, (щ = s), ъ = -, (ы = y), ь = -, э = e, ю = yu, я = ya. (- は何もないということ)

г (g) の多くが k (アイヌ語には清濁の区別がないため清音で統一) ではなく、h で表される音である点は注意が必要である。例えば、Ánokaj an kisyeri gi (‘Анокай ань ки́сери ги) 「これは私たちのパイプだ」(翻訳 9: 147; 『辞典』 51) は *anokaj an=kiserihi* 「私たちのキセル」となる。そのほか、в (v) が音節末で h を表しているような例や、г (g) が k、д (d) が r を表している例もある。また、上の表にないもので注意したいのが、著者が тр (tr) と筆記するものである。これは現代のアイヌ語表記では r に相当するものだが、訳者による表記では、トゥレプンモシリ *Trepun-mosiri* (翻訳 3: 81)、ムカラ・エントゥルム *Múkara entrùm* (翻訳 3: 81) というようになっている。それぞれレプンモシリ *Repun mosiri*、ムカラ・エンルム *Mukara enrum* (特に樺太方言では現行表記で r で表される音が t (~d) に近く発音される) とあるべきものである。

また、文字に関していえば、数は少ないものの и, н, п, л (i, n, p, l) といったキリル文字の翻刻ミスが存在する。これは原著の印刷が鮮明ではないことも関わっているだろう。例えば、「ニパロ (Nipálo, Нипáло) 「大皿」は (液体ではない) 食べ物を出すときに役立つ」(翻訳 26: 129) とあるが、これはニパ (一) ポ (Nipáro, Нипáро) の誤りである。また、*nyetónaki* (нетóпаки) (翻訳 6: 137; 『辞典』 20) のようにキリル文字 п (p) (原本でこの部分は斜体) がラテン文字 n と似た形をしているため起こった間違いもある(キリル文字 c (s) とラテン文字 c の間違いも稀にある)。

次に、アイヌ語の訳としてはふさわしくないとと思われるものが散見される。これは日本語訳そのものの問題と言うよりは、ロシア語訳の問題である。例えば、「Sókhkana. S. byk ryba (Сóхкана. С. быкъ рыба)」(『辞典』308)という項目は「Sókhkana (名) ハゼ」(翻訳 19: 173)と翻訳されているのだが、元のアイヌ語からはカジカであることが分かる。これはロシア語でハゼとカジカが通常区別がなされないことによるのだろう(現代ロシア語ではハゼ、カジカの双方とも *bychok* (бычок))。そして、例文はそのまま使用することは難しいと思われるものが多い。それは文脈を取り出して理解できる訳がついていないものがあるからである。例えば、*An korópye gye, néva kájki étsi kónte* (Ань корóпе ге, нэ́ва кáйки э́чи ко́нтэ) (『辞典』211)という例文は、*an=koropehe nee wakayki eci=konte* 「私が持っているものであるけれども、私はお前にあげる」と解釈できるが、その訳は「物はあるが、お前に返す」(翻訳 17: 125)となっている。このように、『辞典』に収録された例文の訳は、文字通りの意味と異なることが多々ある。

最後に地名に関してだが、辞書部で地名を引くと、その地点の緯度・経度が記載されている。しかし、これを地図に当てはめてどこに該当するのかを知ることは意外と難しい。特に現在の地図では地名自体がロシア語に置き換えられていることが多いという事情もある。書籍化する時点で、地図が加わるとさらに利用しやすくなるだろう。例えば、ナイエロ (*Najero* (Найеро))という地名が登場するが、日本領時代には泊居郡の名寄(なより)と呼ばれていた場所(それ以前ではナヨロともある)で、現在はペンゼンスコエ *Penzenskoe* (Пензенское)となっている。

今後、この辞典をアイヌ語の資料としてさらに有用なものとしていくためには、著者本人が採録したものと引用によるものとを峻別し、著者本人が採録したアイヌ語の語彙、例文を分析していく必要がある。著者の表記が必ずしも一貫しておらず、また、類書に見られない語彙があるため、どう分析してよいのか分からないものがあるが、この点は樺太方言のさらなる掘り起こしによって、いくつか解決するものと思われる。こうした不明点の解明はアイヌ語研究者に残された課題だろう。

さらに、『辞典』はアイヌ語・アイヌ文化の資料としてだけでなく、歴史的な資料としても使用することができる。辞典のもととなった資料は、1975年の樺太千島交換条約によって、樺太がロシア領と決定される以前のものであり、日露共同領有(日露雑居)期を知る上でも重要である。特に、人物に関しては日本側、ロシア側の資料の双方に登場する人物が多く、ほかの資料と付き合わせることで、さらに多くのことを明らかにすることができるだろう。

なお、本翻訳は市販されていないが、北海学園学術情報リポジトリ (<http://hokuga.hgu.jp/dspace/>)で翻訳(6), (8) ~ (26)がダウンロード可能である(2020/1/26 現在)。それ以外の部分は、大学図書館などに寄贈されている北海学園大学学術園論集から閲覧することが可能である。この翻訳をもとにアイヌ語を含め、サハリンに関する学習・研究が進むことを願っている。

参考文献

Refsing (ed.)

1996 *Early European Writings on the Ainu Language: 3*. Oxford University Press, Tokyo.

タクサミ, チューネル・M、コーサレフ, ワレーリー・D

1998 中川裕 (監修) 熊野谷葉子 (訳) 『アイヌ民族の歴史と文化 北方少数民族学者の視座より』明石書店、東京.

知里真志保

1975 (1953; 1962) 『知里真志保著作集 別巻 I』平凡社、東京.

1976 (1954) 『知里真志保著作集 別巻 II』平凡社、東京.

中川裕

1985 「ドブロトヴォルスキーの『アイヌ語ロシア語辞典』について」ナウカ (編) 『窓』52:14-17.

(さかぐち・りょう／千葉大学大学院博士後期課程)